

令和6年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団体名	公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団	
施設名	調布市せんがわ劇場	
内定額	2,583	(千円)

1. 基礎データ

(1) 開館日数・事業本数・貸館日数

項 目		令和5年度	令和6年度
開館日数		318	330
年間事業本数（※1）	主催事業	19	17
	公演事業	8	9
	（内、本助成対象事業本数）	1	0
	人材養成事業	3	2
	（内、本助成対象事業本数）	3	2
	普及啓発事業	7	5
	（内、本助成対象事業本数）	7	5
	その他 内容： 記入してください	1	1
貸館日数	ホールごとの貸館日数	570	615
	ホール名：ホール 座席数：121	284	290
	ホール名：リハーサル室 座席数：	286	325
	ホール名：記入してください 座席数：記入してください		
	ホール名：記入してください 座席数：記入してください		
	ホール名：記入してください 座席数：記入してください		

※1 事業の延べ実施回数ではなく、事業本数を記入してください。

(2) 施設利用者数・利用率

項 目		令和5年度	令和6年度
施設利用者数（※2）	主催事業入場者・参加者数	8,971	7,677
	公演事業	2,576	3,077
	人材養成事業	1,220	400
	普及啓発事業	4,535	3,800
	その他 内容： 記入してください	640	400
	貸館事業入場者・参加者数	8,700	8,800
	その他 内容： 記入してください		
	計	17,671	16,477
施設の利用率(%)		92.0%	92.0%

※2 実演芸術の公演等を鑑賞する者、ワークショップ等に参加する者、その他の劇場・音楽堂等の事業を利用する者の延べ人数を記入してください。劇場・音楽堂等のスタッフや、併設施設(美術館、図書館等)のみへの入場者数は除きます。

(3) 公演事業データ

事業種別		事業本数	公演回数	入場者・参加者数	入場者・参加者率	事業本数内訳						
						演劇	音楽	舞踊	伝統芸能	演芸	総合(※4)	その他
令和5年度	主催公演(※1)	8	42	2,576	77.2%	4	4	0	0	0	0	0
	共催・提携公演(※2)	2	18	1,415	79.9%	0	2	0	0	0	0	0
	貸館公演(※3)	71	150	8,700	50.0%	20	50	1	0	0	0	0
	計	81	210	12,691								
令和6年度	主催公演(※1)	10	38	3,077	81.6%	6	3	1	0	0	0	0
	共催・提携公演(※2)	2	13	1,103	70.2%	0	2	0	0	0	0	0
	貸館公演(※3)	70	150	8,800	50.0%	20	45	5	0	0	0	5
	計	82	201	12,980								

※1 名義主催は除きます。

※2 名義共催を含みます。

※3 「貸館公演」における「入場者・参加者数」及び「入場者・参加者率」は概算で構いません。

※4 「総合」には、フェスティバル等における事業数を記入してください。

2. 公演事業の実績記録と自己評価

(1) 各公演事業における 評価項目「創造性・企画性」に関する評価指標・目標(値)

- 令和6年度助成対象事業のうち公演事業について、助成対象事業ごとに自己評価を記入してください。

事業 番号	事業名	入場者数	入場 者率	評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	備考
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							
		目標 値							
		実績 値							

3. 自己評価

評価項目①:創造性・企画性

評価の観点
・(企画力)地域の状況と芸術性とのバランスが取れた、特色ある事業計画である。 ・(制作力)優れたアーティストやスタッフ等が才能や技能を発揮し、高い水準の作品制作や各種事業が行われている。 ・(発信力・影響力)圏域内外の実演芸術を牽引する成果が期待できる。 ・(レジデントカンパニー・アーティスト)当該劇場を創造拠点又は準拠点とする実演芸術団体やアーティストを擁する。 ・自由設定の観点(任意)

(1) 令和6年度の自己評価

- ・ 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら、事業類型ごとに自己評価を記入してください。

	評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
公演事業						
人材養成事業	育成対象者の事業への満足度 【人-01】参加推奨度(NPS®) ”設問:コンクールへの参加を他の団体に勧めたいと思いますか 情報源:人-01参加者(ファイナリスト) 収集方法:事業終了後の参加団体アンケート” 【人-02】育成プログラムの参加満足度 ”設問:本日のプログラムはいかがでしたか 情報源:人-03育成プログラム参加者 収集方法:育成プログラム終了後の参加者アンケート”	【人-01】参加推奨度(NPS®) ”目標値:40pt以上 基準:NPS®(ネットプロモータスコア)一般的に優秀とされる水準以上” 【人-02】育成プログラムの参加満足度 ”目標値:「大変満足」または「満足」の回答割合が80%以上 基準:令和5年度育成プログラム満足度 79%”【人-02】育成プログラムの参加満足度 ”設問:本日のプログラムはいかがでしたか 情報源:人-02育成プログラム参加者 収集方法:育成プログラム終了後の参加者アンケート”	【人-01】 41.7pt 【人-02】 91.6%	人―01は、せんがわ劇場で実施する若手舞台芸術家の登竜門といえるコンクール及び受賞公演として全国の若手舞台芸術活動者から注目を集める様子がSNSの動向などから見ることができる。文化芸術が根ざしたまちである仙川で新たな才能が出会うきっかけとなり、また文化芸術の発信地となっていくことで地域文化芸術の振興と同時にアイデンティティの情勢にもつながっている。また、終了後もせんがわ劇場の演劇事業に関わることができる「きっかけの事業」として位置付けており、コンクールを通して出会った人材が演劇の専門的技能を地域に還元する仕組みが人―02の「デル」である。参加する若手舞台芸術活動者は、演劇アウトリーチ事業(普及啓発事業)をはじめとした、せんがわ劇場が実施する事業全般で企画制作、出演、講師として携わり、当該事業によって育成した人材が地域の文化芸術の振興、発展に寄与した。 人―02は、従来の任意団体的な立ち位置から、劇場が直営する形に見直しを図り、ミッションやビジョンの達成を目標とした人材育成事業としての性質を強め、インキュベートプログラムの導入などによる計画的な人材養成を行うよう努めた。特に、アウトリーチ事業の企画運営、当日講師だけではなく、劇場事業全般において活躍する劇場のレジデントアーティストとなり、劇場の専門人材としての役割を果たすなど、せんがわ劇場が若手舞台芸術家の育成と文化発信の拠点となり、機能を発揮することができている。		
普及啓発事業	参加者の文化芸術活動への参加意欲 ”設問:文化芸術事業について、また観たい(参加したい)と思いますか ※アウトリーチ事業(普-02、普-05)の場合は「劇場に行ってみたいと思いますか」とする” ”情報源:各事業の鑑賞者・参加者 収集方法:各事業終了後の鑑賞者・参加者アンケート”	”目標値:「大いに思う」または「思う」の回答割合が90%以上 基準:令和5年度普及啓発事業実績値 89.5%”	実績(値) 84.2%	普―01では、劇場を第3のコミュニティと位置づけ、自己表現をしながら他の参加者と相互に交流できる場となることを目指し、それぞれのターゲットを明確に設定したうえで、短期間で開催することで参加しやすくなるようなプログラムを実施した。全4回のうち3回のワークショップでは、「デル(人―02)」のメンバーが運営側として参加した。メンバーは、演劇分野における専門性と、育成事業により高められたファシリテーション能力を活かし、グループとして企画運営および当日の進行・講師を担い、事業に貢献した。 残りの1回は、小笠原響せんがわ劇場芸術監督が演出した公演事業『ドクターズ・ジレンマ』(※助成対象外)の翻訳者である小田島創士氏を講師に迎え、演劇初心者向けワークショップを実施した。100年以上前のロンドンで初演され、本邦初演となった本作について、当時の時代背景や脚本に関する分かりやすいレクチャーが行われ、参加者の興味を引き出すことができた。 他の普及啓発事業を含め、参加者の文化芸術活動への参加意欲を問うアンケート結果は84.2%となり、目標値には達しなかった。一方で、普―02のアウトリーチ事業(中学校で実施)では、参加者満足度が99.4%と高い評価を得ており、参加者に対し文化芸術に触れる機会や、内容を楽しむ場を提供できていることがうかがえた。		

(2) 「創造性・企画性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

せんがわ劇場では、令和6年度から新たに芸術監督として小笠原響氏を迎え、芸術性と創造性の高い事業展開を図ってきた。芸術監督自身が演出を務めた公演事業「ドクターズジレンマ」(助成対象外)は、主要新聞や専門誌において劇評として取り上げられ、高い集客率と観客満足度を獲得した。また、これと関連性をもたせて実施した普―01のワークショップ(以下、助成対象)では、「ドクターズジレンマ」の翻訳を手がけた小田島創士氏を講師に招き、演劇初心者向けのワークショップを開催した。本作は100年以上前にロンドンで初演され、日本では初めての上演となった。注目度の高い演目を題材に、当時の時代背景や脚本についてのわかりやすいレクチャーを行い、実際に一場面を演じてみる体験型の企画を提供した。これまでもせんがわ劇場では公演事業や普―を実施してきたが、創造性の高い公演事業を起点とした普―を展開したことは新たな取り組みであり、演劇初心者の関心を引き寄せた点において、劇場の創造性と企画性の向上に資する好例である。

普―04「親と子のプチ・クリスマス・メルヘン」では、家族の思い出となる気軽な文化芸術鑑賞の機会を提供し、地域に「親子で文化芸術に親しむ習慣」を根付かせることを目的とした。本事業は、サン・サーンス作曲の組曲「動物の謝肉祭」を題材とし、国籍や障害の有無を問わず誰もが楽しめる音楽劇として、地域のファミリー層を主な対象に実施した。近年注目を集める演出家スズキ拓朗氏(人―01・演劇コンクール出身)を迎え、出演者には「DEL(デル)」メンバーを起用した。音楽面では、仙川地域に所在する桐朋学園芸術短期大学の学生が演奏を担当し、同短期大学の教授および桐朋学園大学の教授が音楽監修を務めた。演劇と音楽が融合した総合芸術としての本事業は、舞台芸術の多様性、楽しさ、自由さを紹介する内容となっており、学術機関との連携や人―01・02の関係者が創作に関与することで、せんがわ劇場ならではの創造性と企画性のある事業となった。

また、普―01内の公演関連ワークショップを除くすべての普―には、「デル(人―02)」のメンバーが企画制作および講師として参加している。鑑賞型の普―03および05は、「デル(人―02)」が脚本や演出を担い、その創造性を発揮して制作された「せんがわ劇場オリジナル」の創作劇である。道具類もコンパクトに工夫され、劇場の舞台だけでなく、市内の多様な公共施設での上演が可能となるよう配慮されている。

普―02は、「デル(人―02)」メンバーが実施先である調布市内の中学校、特別支援学級、母子家庭支援施設などの教職員や施設職員と緊密に連携を図り、生徒や利用者のニーズを丁寧に把握しながら、時間をかけて継続的にワークショップを実施している。

普―01では、劇場を「第3のコミュニティ」と位置付け、自己表現を通じて参加者同士が交流できる場を創出した。明確なターゲット設定と短期間での開催により、これまで劇場に足を運ぶ機会が少なかった市民も参加しやすくなるように配慮したプログラムである。

人―01「演劇コンクール」は、専門家や一般の演劇ファンを問わずSNS等で話題となり、広く注目を集めている。審査員には演出、俳優、脚本の各分野において現在活躍中のアーティストを毎年招聘しており、「この審査員の前で自分たちの作品を見てもらいたい」と応募理由に明記する団体も複数存在している。近年は毎年25～30団体から安定した応募があり、今回も全国から28団体の応募があった。令和6年5月に実施された本コンクールでは、「パストリオ」がグランプリおよび他4部門を受賞し、令和7年6月上旬に10回の受賞記念公演を実施した。そのうち7公演が満席となった。これは、団体側による積極的なプロモーションに加え、アフタートークに専門審査員の古川日出男氏(作家)、映画監督の横浜聡子氏を招聘したほか、演劇ジャーナリストであり、せんがわ劇場演劇外部アドバイザーを務める徳永京子氏の応援コメントや他アーティストからの高評価も後押しとなった。パストリオはこれまで公共劇場での上演経験が少なく、今回の受賞公演によって初めて公共劇場との共催公演を経験し、多くの観客に感動を与えた。この成果は、団体の実力に乗じ、劇場がプロデュースに関与したことで企画力が高まり、団体にとって飛躍の契機となった好事例であると考えている。

評価項目②:国際性(任意)

評価の観点
・(国際プレゼンスの向上)海外の劇場やフェスティバル、実演芸術団体等と連携し、国際共同制作や海外作品の招聘等に取り組んでいる。 ・(国際交流)アーティストや文化芸術関係者の招聘等、人的交流や情報交換が行われている。 ・(新たな創客への取組)在住外国人や訪日外国人に向けて文化芸術体験の機会を提供する等、グローバルな視座で創客に取り組んでいる。 ・自由設定の観点(任意)

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など

(2) 「国際性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

評価項目③:地域文化拠点機能

評価の観点
・(文化拠点)地域の特性やニーズを踏まえ、地域の文化資源を活用するなど、地域の文化拠点として事業が組み立てられている。 ・(地域連携)地域の関係機関と連携・協力し、地域コミュニティの創生や社会課題の解決等に取り組んでいる。 ・(児童生徒への機会提供)次代を担う子ども達を対象とした鑑賞や体験事業が行われている。 ・ホール利用サービス(貸館事業)の向上 ※ ・自由設定の観点(任意)

※ ホール利用サービス(貸館事業)を行っていない場合は不要

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評定	所見	対応・追加情報など
事業実施において連携した団体の数 ”設問:令和6年度事業の実施の際に連携した団体の数 (市内学校、児童厚生施設、児童福祉施設、高齢者福祉施設、社会教育施設、 高等教育機関、地域団体、市内民間企業 等) 情報源:各事業の実施報告、チラシ等へのクレジット 収集方法:令和6年度実施事業が全て終了した時点で集計 ※広報協力のみ の団体は加算しない ※アウトリーチ事業(普-02、普-05)の実施先を含める”	”目標値:12団体以上 基準:令和5年度連携団体 12団体”	16団体	せんがわ劇場では、令和6年度からスタートした芸術監督制のもと、文化芸術の本質的価値を高める力と、劇場が運営する「デル(人―02)」に集う次世代の舞台芸術活動者たちの演劇教育スキルや企画制作力を活かし、地域商店街や近隣大学との連携を深めながら、劇場と、劇場のある仙川地域にとどまらず調布市全域に向けた多様な事業展開を図った。 【公演事業(助成対象外)】 芸術監督が演出を担う公演を軸とすることで、芸術性・創造性の高い事業を実施した。 【人材養成事業】 全国各地から集まった次世代の舞台芸術活動者が、日頃の研鑽の成果を発揮しつつ、自らの創造性を表現し、専門家(審査員)や市民(公募審査員)、既存の「デル(人―02)」メンバーとの交流を通じて相互に刺激を受ける場として、「演劇コンクール(人―01、28団体応募)」を開催した。そこから選抜された団体が、せんがわ劇場の事業展開に加わる「デル(人―02)」へと参加した。参加メンバーは、市内全域で実施されたアウトリーチ事業の講師や、劇場内でのワークショップや公演事業等のスタッフとして、計15件の事業に関わり、育成プログラムで習得したスキルを実践した。 【普及啓発事業】 劇場という非日常的な空間を「サードプレイス」として位置づけ、世代や嗜好の異なる多様な市民が相互に交流しながら文化芸術への関心を高めるワークショップを実施した。鑑賞型の普及啓発事業においては、演劇コンクール出身者や「デル(人―02)」メンバーが演出・制作・出演を担当し、音楽面では桐朋芸術短期大学教授の監修のもと、桐朋学園大学音楽学部が演奏を担当するなど、地域の各機関との連携を活かした事業を展開した。 【アウトリーチ事業】 調布市内のスペシャルニーズに対応する中学校の学びの多利用化教室(特別支援学級)、適応指導教室、児童養護施設、都立特別支援学校、母子家庭支援施設等を対象に、それぞれの施設と緊密に連携し、課題を共有しながら、「デル(人―02)」メンバーを中心として、せんがわ劇場が培ってきた演劇教育のスキルを活かし、通年でプログラムを実施した。これにより、参加者のコミュニケーション能力や自己表現力の向上に貢献した。また、文化芸術や劇場へのアクセスが困難な児童・生徒に対しては、ワークショップ付きの鑑賞プログラムを提供し、文化芸術の価値を伝える機会とした。		

(2) 「地域文化拠点機能」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

せんがわ劇場は、調布市の東端・仙川町に位置する客席数121の小劇場である。規模は小さいながらも、地域文化拠点としての役割を果たすことを目指し、「来場者を大切にする誠意と全力」「すべての舞台芸術活動者、とりわけ次世代を担う人材の育成」「調布市全域への貢献」を行動原理として掲げ、劇場のミッションに基づく事業を実施してきた。
令和6年度からは、演出家の小笠原響氏を芸術監督に迎え、芸術性と創造性の高い文化芸術を発信する体制を整えた。その第一弾として実施した公演事業『ドクターズジレンマ』(助成対象外)は、仙川地域にとどまらず、市内外から演劇ファンを集めるとともに、演劇ジャーナリズムの専門家から高く評価された。実際に、作品に対する劇評が全国的な演劇媒体に掲載されたことにより、地元で質の高い舞台芸術に触れる価値を広く示すことができた。このように、地域の小劇場が王道の演劇作品を創造・発信することで、当劇場および他の主催事業への関心も高まり、文化拠点としての発信力が向上したものと考え。 さらに、芸術監督就任に伴い、当該公演の翻訳家や出演俳優が講師を務めるワークショップを実施し、作品の背景や戯曲の読み方に触れる機会を提供した。この企画は、市民にとって演劇への理解を深め、参加体験を通じて学びを得られる場となった。これは、せんがわ劇場が「学びの場」へと機能を拡張した一例であり、新たな事業展開によって地域の文化活動の幅を広げることに寄与したといえる。
地域との関わりを増やし、地域全体に向けて文化芸術を発信する「演劇アウトリーチ事業」を調布市内の各地で展開した。この事業では、地域や実施先が抱える課題やニーズを的確に把握した上で、鑑賞型およびコミュニケーション型のプログラムを適切に選択し、実施してきた。対象は、文化芸術に触れる機会が少ない児童生徒、外国人、高齢者など多様であり、文化アクセスの格差を縮小する役割を担った。 特に「学びの多利用化教室」における通年実施のアウトリーチでは、コミュニケーションが苦手な生徒がクラスメートに自発的に話しかけるようになったほか、学年間の交流が活性化し、友人関係が学校生活の動機づけになる様子が見られた。このような成果は、劇場およびその近隣に留まらない地域や施設においても波及効果を生み出しており、せんがわ劇場が地域全体を視野に入れた文化拠点として機能していることを示すものである。
加えて、劇場が実施する公演事業(助成対象外)、人材養成事業、普及啓発事業には、「デル(人―02)」メンバーが広く参画しており、次世代を担う舞台芸術人材の育成に貢献している。劇場が有する専門的なノウハウや地域資源を活用しながら、若手の育成と地域文化の振興を両立させる体制が整いつつあることは、地域文化拠点としてのせんがわ劇場の機能が着実に向上していることを裏付けている。

評価項目④: 多様性とアクセシビリティ

評価の観点
・(プログラムの多様さ)プログラムの種類や形態が多様で、幅広い観客や参加者に訴求する。 ・(参画者の多様さ)アーティストやスタッフとして参画する人々の属性(性別、年代、居住地、他)が多様である。 ・(アクセシビリティ)障がいの有無や年齢、性差、国籍、居住地、経済的状況等に関わらず、あらゆる人々と実演芸術をつなぐため、施設の構造・設備上の配慮、プログラム上の創意工夫やサポート、アウトリーチ等が行われている。 ・自由設定の観点(任意)

- (1) 令和6年度の自己評価
- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
アウトリーチ事業の実施件数 “設問:令和6年度に実施するアウトリーチ事業の実施件数 情報源:各事業の実施報告 収集方法:令和6年度実施事業が全て終了した時点で集計”	“目標値:14件以上 基準:令和5年度実施件数 14件”	16件	調布市の市民意識調査によれば、コロナ禍以降、市民の文化芸術活動の機会は減少している。一方で、当財団が実施した市民意識・ニーズ調査からは、「きっかけがあれば自分も表現の場を体験したい」と考える市民が多く、潜在的なニーズが存在することが明らかになった。 また、何らかの事情により文化芸術へのアクセスに困難を抱える市民も増加傾向にあり、参加機会を平等に広げるためには、仙川地域に限らず調布市全域への展開が重要であると認識している。そのため、令和6年度は市内各所でのアウトリーチ事業の実施件数を指標とし、16件の実施によって目標値を上回る成果を上げた。 芸術監督の就任を機に、芸術性と創造性の高い公演事業「ドクターズジレンマ」(助成対象外)を実施し、関連企画として普―01「わたし／あなたのワークショップ」では、戯曲の翻訳を読み解く講座や、当時の社会背景を学ぶ機会を提供した。 このワークショップは、劇場が「地域の文化拠点」となることを目指し、年間を通して多様な世代や背景を持つ市民が、非日常の空間で文化芸術に触れられるよう企画された。演劇に関心のある幅広い世代を対象に、シニア向け、乳幼児とその保護者、夏休み期間の子ども向けなど、多様な層に向けたプログラムを展開し、知識や技術の習得にとどまらず、創作体験を通じてコミュニケーション能力や自己表現力の向上を促した。 演劇アウトリーチ事業は、「コミュニケーション型」(普―02)と「鑑賞型」(普―05)の2つに大別して実施した。特に調布市内では、学びの多用化教室(不登校児童生徒支援)、適応指導教室、児童養護施設、中学校の特別支援学級、母子生活支援施設、都立特別支援学校、高齢者デイサービス、調布市国際交流センター、市内児童館など、文化芸術へのアクセスが困難な人々に向けて多様な取り組みを展開した。 こうした施設・団体の特性やニーズに即し、せんがわ劇場が蓄積してきた演劇教育のスキルを生かして事業を実施することで、参加者のコミュニケーション力や自己表現スキルの向上に寄与した。		

(2) 「多様性とアクセシビリティ」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

【多様性とアクセシビリティの向上に関する取組と成果】 令和6年度、せんがわ劇場では、年齢、性別、国籍、障害の有無にかかわらず、多様な市民が文化芸術活動に参画できる環境づくりを推進した。
【プログラム、参画者の多様性について】 芸術監督自らが演出を務めた公演事業「ドクターズジレンマ」(助成対象外)では、一流の出演者とスタッフが参画するなか、「デル(人―02)」のメンバーが制作・出演に加わり、ベテランと若手の交流が生みだした。劇場がプロと育成中の若手をつなぐ場として機能し、世代間の学びと成長が促された。 また、人―01「せんがわ劇場演劇コンクール」には、関東のみならず関西・北海道からも若手舞台芸術家が参加した。審査員は、小笠原響芸術監督(演出家)、徳永京子せんがわ劇場外部アドバイザー(事業監修・ジャーナリスト)をはじめ、竹中香子(俳優・演劇教育)古川日出男(小説家・劇作家)山本貴愛(舞台美術・衣裳デザイナー)ら幅広いジャンルの専門人材が集まり、公募による市民審査員は10代から70代までの演劇ファンが務め、多世代・多地域からの参画が実現した。 普―04「親と子のプチ・クリスマス・メルヘン」では、若手演出家(コンクール出身者)のスズキ拓朗氏を起用。音楽監修には桐朋学園芸術短期大学教授が、演奏は桐朋学園大学学生が担当し、「デル」のメンバーも俳優として参加した。劇場と地域の文化教育資源が連携し、多様な主体による舞台芸術創作の場となった。 普―02,05の演劇アウトリーチ事業では、調布市内の教育・福祉施設において「デル」のメンバーが演劇教育のスキルを提供した。不登校児童生徒支援(学びの多用化教室)、適応指導教室、児童養護施設、中学校特別支援学級、母子生活支援施設、都立特別支援学校、高齢者デイサービスなどで実施した。教員・施設職員からは「新たなコミュニケーションの視点を得た」「子どもの隠れた個性を発見できた」との声が寄せられ、児童生徒からも「コミュニケーションの楽しさを知った」「もっと文化芸術を知りたい」との感想があった。 調布市国際交流センターが主催する外国人の日常生活支援の一環として開催するサークルに、「デル(人材養成事業02)」のメンバーが加わり、今年度はじめてワークショップを実施したところ、外国人同士が共通のテーマのもとで体を動かし、交流することで新たなつながりを生み出すことができた。
【アクセシビリティ向上への取組】 「ドクターズジレンマ」(助成対象外)では、最寄駅からの誘導サポート、音声ガイド、字幕タブレットの貸出、事前の台本貸出等の支援を実施し、4件の利用実績を得た(目標3件を達成)。 また、すべての事業において、障害・年齢・性差・国籍等による不安を事前に相談できる体制を整備したほか、劇場(財団)ホームページも、ウェブアクセシビリティ2.0に準拠し、知覚・操作・理解に配慮された設計とした。 これらの取組を通じて、多様な立場の市民が芸術文化にアクセスできる環境整備を着実に進めることができた。

評価項目⑤: 自由設定(任意)

①創造性・企画性、②国際性、③地域文化拠点機能、④多様性とアクセシビリティ、⑥運営体制と持続可能性 の項目では成果や課題に言及しきれない事柄について、自己評価を行ってください。

評価の観点
当劇場のビジョンのひとつである「持続的に発展する劇場」に向けて、劇場で養成した人材が当劇場が所在する地域をはじめ、当該の人材が活動地域でスキルや知識を活かして活躍する。

(1) 令和6年度の自己評価

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
地域で活躍する人材を輩出できているか ”設問:せんがわ劇場で習得した知識・スキルが活かされた事業の実施件数 情報源:デル(人-02)参加者 収集方法:令和6年度末に実施するデル(人-02)参加メンバーへのアンケート”	”目標値:14件以上 基準:令和4年度参考実績値 14件”	15件	せんがわ劇場は、「豊かな想像力と創造性を備えた次世代を育てること」をミッションとして掲げている。地域に根差す劇場として、地域社会と相互に影響を与え合いながら、芸術性と創造性の向上を図るとともに、将来の舞台芸術を担う人材の育成を推進している。育成された若手舞台芸術家は、劇場の各事業に参画し、とりわけ普及啓発事業において、文化芸術の継承に寄与する仕組みを構築してきた。 演劇コンクール(人―01)に出場した団体の中から希望者が「デル(人―02)」に加入している。加入者は、参加要件でもある認定プログラムや継続的な育成プログラムを通じて、普及啓発活動に必要なファシリテーション能力を身につけ、演劇に関する社会的な課題について理解を深めている。また、メンバー同士の相互交流を通して学びを深め、劇場事業への実践的な参画を通じてスキルを発揮している。 令和6年度には、小笠原響氏を芸術監督に迎え、芸術性・創造性の高い公演制作を核とする事業体制を整備した。また、学校や福祉施設等の地域ニーズに応じた演劇・音楽のアウトリーチ事業を推進し、地域とのつながりを強化することができた。さらに、「デル(人―02)」については、年度初めに要綱を整備し、アウトリーチにとどまらず、公演や人材養成、普及啓発の各事業に関わることができる体制を明示した。これにより、「デル」は劇場直営のレジデントアーティストとして位置づけ、その役割を明確にした。 令和6年度には、「デル」のメンバーが劇場主催の演劇事業15件に参画した。普及啓発事業においては、各事業の目的や対象層に応じてプログラムを企画・実施し、実演家としても能力を発揮した。また、芸術監督が演出を務めた公演「ドクターズジレンマ」(助成対象外)においては、制作スタッフや出演者として参画し、一流の芸術家とともに舞台作品を構築する過程に立ち会う経験を得た。これは、劇場空間が人材育成の現場として機能した好例である。 そのほか、市内各地の公共機関で実施したアウトリーチ事業では、施設ごとの課題やニーズを丁寧に把握し、それぞれに適したプログラムを企画した。たとえば、「学びの多用化教室」分校で実施したプログラムでは、生徒のコミュニケーション能力の向上に貢献した。このような取り組みにより、劇場の人材養成機能が地域社会と連携しながら実質的な成果を生み出していることが確認できた。		

評価項目⑥:運営体制と持続可能性

評価の観点		現状	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
「実現性」の評価項目より							
(ア)	(多様な財源の確保)予算計画が妥当であり、事業収入のほか、各種助成金や寄附金・協賛金等の獲得に努めている。	寄附金・協賛金等が獲得できていないという課題がある。	劇場職員が年度内に1回以上ファンドレイジング関連の研修に参加する。	寄附金・協賛金などの自己財源の獲得のため研修として、職員がEラーニングにより研修を受講した。	Eラーニング研修受講や、助成金等獲得については、職員と専門人材がミーティングを重ねることで次年度以降の賛助会員制度、ネットでの寄附受付制度構築などを進めることにつながった。		
(イ)	(広報・営業力)広報計画が充実しており、券売や集客、会員制度等の拡充に努めている。	市内全戸配布の財団報を中心に紙媒体は充実しており、WEB上での広報展開の充実を計画している。	劇場公式X(旧ツイッター)のフォロワーを2,800人に増やす。 現状値 2,617人	2840人	常に動きのある劇場ということを見せていくことで、広く興味関心を集めるために、劇場公式SNS(X,インスタグラムほか。いずれか)を原則として毎日更新したことにより、フォロワーを増やすことができた。		
(ウ)	(他館連携)他の劇場・音楽堂等との事業連携や協力・支援を通じて、効果的で効率的な事業運営を行っている。	他館との連携は現状では出来ていない。	類似する事業を実施している会館との意見交換・勉強会を令和6年度内に1回以上実施する。	バリアフリー事業の実施事例の視察1件 他館との運営状況等の意見交換1件 国際交流に関する事業実施例などを都内劇場職員からヒアリング、情報提供を受ける 1件	意見交換・勉強会などの実施により、類似事業を実施する劇場等と情報交換を行い、今後の事業に活用できる情報を得ることができた。事業連携までには至らないため、その点は今後の課題としたい。		
(エ)	(設置者)円滑な事業の継続のため設置者と適切に意思疎通を図っており、設置者による人材や財源の確保等が期待できる。	定期的な会議を設けているほか、出向者による人事交流を継続している。	継続を目標とする。	劇場職員と芸術監督、演劇ディレクターチーム、外部アドバイザーとの定期的に会議を実施し、ミッション達成のための事業計画、個別事業の企画を行った。	専門人材と劇場職員が相互に役割を理解しながら、緊密なコミュニケーションができており、信頼関係が築けている。事業実施の方向性が共有できていることで、計画履行における揺れが生じることなく、事業遂行が果たせている。		
「持続可能性に関するチェックシート」より							
(オ)	(芸術監督)芸術監督等、劇場運営の芸術面を統括する人材が配置されている。	芸術監督、演劇ディレクターチームを設置し、加えて演劇外部アドバイザーを招聘している。	継続を目標とする。	継続している。	今年度から芸術監督が正式に就任し、芸術・創造性の高い事業展開を図ることに繋がった。		
(カ)	(長期的経営)長期的視点に立ち、劇場運営を統括する、経営実務者が配置されている。	公文協の研修受講など必要な育成を行った上で、適性のある者を配置している。	継続を目標とする。	継続している。	職員が公文協の研修を受講するなど、継続が図れている。		
(キ)	(専門人材の確保)今日的な劇場運営に必要な職能や専門性を踏まえ、運営体制が整備されている。あるいは専門人材の確保や育成に努めている。	職員採用時に舞台芸術の専門性を重視すると共に、必要な研修を行い、育成に努めている。	継続を目標とする。	継続している。	アートマネジメントの能力が多岐にわたるため、アートマネジメントの能力とはという視点を常にアップデートしていくことは必要だが、概ね適切である。		
(ク)	(職制の整理)芸術監督、館長、支配人、プロデューサー、その他管理職の職位及び職能、一般職員の職務内容等が専門性を基に整理され、役割分担されている。	芸術監督、演劇ディレクターチーム、館長(職員)が役割分担のもと、三位一体で劇場運営を進めている。	継続を目標とする。	継続している。	今年度から芸術監督が正式に就任し、芸術創造性の高い事業をほかの専門人材、劇場職員とともにミッションとビジョン達成を見据えながら実行できた。		
(ケ)	(世代間バランス)年齢バランスを考慮した人材確保を行っている(若年層の雇用に努めている)。	令和6年度は新卒職員2名を採用し、若年層の雇用並びに育成に取り組んでいる。	継続を目標とする。	継続している。	若年層の職員の獲得を積極的に行っており、適切である。		
(コ)	(ジェンダーバランス)女性管理職比率が30%以上である。あるいは、女性の管理職やリーダー職への登用に努めている。	女性管理職登用を積極的に行い、37.5%となっている。	継続を目標とする。	継続している。	女性管理職比率も高く、適切である。		
(サ)	(ワークライフ・バランス)仕事と育児・介護等の両立支援制度を整備し、推進している。	整備を行い、「えるぼし認定」に認定されている。	継続を目標とする。	継続している。	ワークライフバランスの必要性を提唱しており、適切である。		
(シ)	(コンプライアンス順守)情報セキュリティをはじめ、各種コンプライアンスの順守規定を策定し、必要な研修を行っている。	関連規程を策定し、定期的に研修を行い、セキュリティ確保に努めている	継続を目標とする。	継続している。	適切に継続している。		
(ス)	(ハラスメント防止対策)職場内及び創作現場におけるパワー・ハラスメント、セクシュアル・ハラスメント等防止のための指針等を策定・周知し、必要な研修を行っている。	関連規程を策定し、定期的に研修を行い、ハラスメント防止に努めている	継続を目標とする。	継続している。	劇場職員、スタッフを対象に研修を実施している。また、主催事業実施時には、ハラスメント防止対策ポリシーを参加者に周知のうえ同意を取り、未然防止に努めている。		
(セ)	(適正な契約事務)アーティストやスタッフと適正な契約書を交わしている。	契約事務規程に基づき、適正な契約を行っている。	継続を目標とする。	継続している。	適切である。		

4. 総評

・ 団体の自己評価

【せんがわ劇場のミッションとビジョン】
せんがわ劇場の所在する調布市仙川は、桐朋学園や白百合女子大学などの学術機関を有し、人を育み、表現者を応援する「文教のまち」としての特性を持っている。多様なライフスタイルが集まる地域であり、文化芸術への関心が高く、文化発信の拠点としてのポテンシャルを備えている。せんがわ劇場は、公共性を維持しつつ地域の課題やニーズに応えるべく事業を展開してきた。席数121の小劇場という限られたリソースの中で広範に文化芸術を発信するため、「3つの2000分の1」を行動原理とし、芸術監督、劇場職員、関係する専門人材がこれを共有している。調布市せんがわ劇場設置条例、調布市の文化芸術推進に関する施策、関連法制度を踏まえつつ、令和7年度施行予定の調布市芸術振興ビジョン（作成段階において劇場も関与）に基づいて、地域における舞台芸術の創造・発信拠点として、せんがわ劇場独自のミッションとビジョンを策定した。

【ミッション・ビジョン達成のための組織体制】
令和6年度から芸術監督制を導入し、演出家の小笠原響氏を迎え、芸術性と創造性の高い舞台芸術の発信を目指す体制を強化した。ミッションとビジョンを確実に推進・達成するため、①芸術監督、②館長（劇場職員）、③演劇ディレクターチームの「三位一体」による運営体制を開始した。芸術監督は芸術・創造面の統括を担い、創造的な事業を実施し、館長は公益性と施設のミッションを反映した経営を行い、演劇ディレクターチームは地域とのつながりや演劇人のネットワーク、制作スキルを生かして事業制作を行っている。なお、演劇ディレクターチームのメンバーは、若手芸術家グループ「デル（人材養成事業02）」から選出している。令和6年度からは、劇場が定めた要綱に基づき、デルを劇場のミッション・ビジョンに合致する人材養成グループとして明確に位置づけた。芸術監督・演劇ディレクターチーム・デルのメンバーは、レジデントアーティストとして劇場に密接に関わりながら、地域に根差した創造拠点としての劇場運営を持続的に支えた。

【芸術監督による公演事業とその波及効果】
芸術監督小笠原響氏の就任を機に、同氏の演出による「ドクターズジレンマ」を公演事業として実施した（助成対象外）。本事業では、演劇の本場ロンドンで100年以上前に上演されたジョージ・バーナード・ショーの隠れた名作を掘り起こし、本邦初演を実現した。せんがわ劇場から本格的な舞台芸術を発信することにより、市民のアイデンティティの醸成に寄与し、主要新聞や演劇専門誌にも劇評が掲載されるなど大きな注目を集めた。また、本事業には芸術監督が選定した一流の制作スタッフや俳優陣に加え、デルのメンバーも参加し、若手は一流の現場で実践的な学びを得る機会となり、ベテラン側も若手の視点を知る貴重な経験となった。芸術監督は、本事業にとどまらず、他の普及啓発事業や人材養成事業を含む劇場事業全体に助言と指導を行い、文化芸術の質的向上に貢献した。

【地域との関わりを深める普及啓発事業】
普及啓発事業01「わたし／あなたのワークショップ」では、劇場という非日常の空間で多世代が文化芸術に親しみながら、自己実現を目指す第3のコミュニティの場を創出した。短期間で安価な参加型ワークショップとして、対象者を明確に設定し、アウトプットも重視した内容とした。演劇アウトリーチ事業である普—02、05では、実施施設のニーズや特性を丁寧に聞き取り、文化芸術に触れる機会が少ない、または困難な層に向けた演劇体験の提供を行った。普—05では「デル」のメンバーが制作・出演を担い、児童館などあらゆる場所で上演可能なコンパクトな形式を採用した。児童館では、家庭や学校に次ぐ子どもたちの第3の居場所として、自由で活発な文化芸術参加の場を提供し、自己や他者の再発見につなげた。さらに普—04のファミリー層向け劇場上演では、劇場機材を最大限に活用し、オリジナル作品を劇場版として構成した。音楽と演劇が融合したノンバーバルの音楽劇「動物の謝肉祭」は、外国籍市民や障害のある市民など、多様な層に向けて質の高い文化芸術を気軽に提供することを目指して実施した。スタッフには、せんがわ劇場演劇コンクール（人—01）出身で現在高い評価を受けているスズキ拓朗氏を演出に、桐朋学園芸術短期大学の松井康司教授を音楽監修に迎え、演奏には桐朋学園大学学生、俳優にはデルのメンバーも出演者として参加した。

【スペシャルニーズへの社会貢献演劇】
調布市には、不登校特例校や児童養護施設、特別支援学級、母子家庭支援施設など、演劇教育のスキルを必要とするスペシャルニーズが存在する。せんがわ劇場では、それらの施設において「社会貢献演劇」を展開し、集団内でのコミュニケーション能力や自己表現スキルの向上を支援し、自己肯定感を育むことに貢献している。多くの普及啓発事業において、デルのメンバーが企画、構成、運営、出演に関わっており、劇場スタッフとの連携や、生徒との継続的な交流を通じて高い実践力を発揮した。

【人材養成事業による持続的な劇場運営】
演劇コンクール（人—01）は、作品の優劣を競うことにとどまらず、出場団体が審査員や観客、市民と交流し、新たなつながりを生む場として位置づけている。コンクール参加者には、エントリー時に「将来せんがわ劇場で実施したいこと」や「現代演劇に感じる課題とその解決策」を記述させ、審査に反映させており、それがデルでの活動への導線となっている。デルでは、育成プログラムやインキュベート企画、OJTを通じて企画・運営力を養い、劇場事業やアウトリーチ活動に積極的に関わっている。令和6年度からは芸術監督もデルに助言・指導を行い、演出公演への参加も促すことで、人材育成の幅が広がった。

【バリアフリー（助成対象外）】
せんがわ劇場では、身体的、精神的、社会的な障壁を取り除き、誰もが文化芸術を享受できる環境づくりを目指している。具体的には、事前レクチャーやバックステージツアー、駅からの誘導サポート、音声補聴や字幕掲出などの鑑賞支援を行っており、利用者数は増加傾向にある。これらの取り組みは、文化芸術を一部の人々だけのものにせず、すべての市民に開かれたものにすることを目指したものであり、今後も継続的な改善と拡充を図っていく。

・所見

